



新撰筑波集上

伊地知文庫
 文庫20
 6
 1





伊地知氏書冊

それ連家のお和の御所の御とてその
かきも御らうて人の母は御らうてその御
よ中に御らうてその御家御のよなる
御波の言はれにてもその御の御とて
その御の御家持の御の御の御
その御の御の御の御の御の御の御



なほ子へおぼせしむるは、
心も志も、
浦もする、
志強の道も、
おれも代りて、
たるそこの、
御まの、

道と教ふこと、
唐の字に、
あめて、
こと、
此道、
あふ、
増物の法と、

あなごをよつたあはれにうらやまのうらやまは
はなはなとわがくにちかやまのふもとに
あはれにうらやまのうらやまは
はなはなとわがくにちかやまのふもとに
あはれにうらやまのうらやまは
はなはなとわがくにちかやまのふもとに
あはれにうらやまのうらやまは
はなはなとわがくにちかやまのふもとに
あはれにうらやまのうらやまは
はなはなとわがくにちかやまのふもとに

あなごをよつたあはれにうらやまのうらやまは
はなはなとわがくにちかやまのふもとに
あはれにうらやまのうらやまは
はなはなとわがくにちかやまのふもとに
あはれにうらやまのうらやまは
はなはなとわがくにちかやまのふもとに
あはれにうらやまのうらやまは
はなはなとわがくにちかやまのふもとに
あはれにうらやまのうらやまは
はなはなとわがくにちかやまのふもとに

よきかきせの月神のまじはし句の
染とちうて糸のうまなるしよと
きしはるかにやまぬる愛可れやりに
あつてしほまの若きうまふに從う
有しのたしきすしけししてきもえん
なる解とてしるの救済国何う及よ
あふまらぬいかにの連新しの家へ流の
丸

集。撰者てその卯のしよをいん
え及よこともあられの今の集よのきる
こまね近く家物法師とてしてこの
道はなる者あまてよく連新のり
と海よの海にんどのいよまよつ月神
はしに仲身の何はけしつしとれと
いかにの上はことあつて卯のあ

1660
Sull'acqua bevono i
Sull'acqua bevono i
Sull'acqua bevono i
Sull'acqua bevono i
Sull'acqua bevono i
Sull'acqua bevono i

1661
Sull'acqua bevono i
Sull'acqua bevono i
Sull'acqua bevono i
Sull'acqua bevono i
Sull'acqua bevono i
Sull'acqua bevono i

新撰菟玖波集

春連歌上

春のつらさの長閑さ
と春のつらさのつらさ

御製

むすまたのつらさも
家の百首をよみ

あゝいふのむすは村清
ふりあり 慈照院途贈大政有

兼子よきいふのいふ誠心
都の道子いふすまは

三品親王

兼子今いふのいふ子いふ物
出る目教子衣いふ平衣
九

前九大夫

いふいふいふのいふいふいふ
いふいふいふのいふいふいふ
兼子白近親

兼子いふいふいふいふいふ
いふいふいふいふいふいふ
入道前九大夫

うすへいへいあまのこのおまじ

陽春あまの春日よ花は咲く

柔細を親長

あまのあまのよすむじ遠く

まきぬ被あまのあまの

推大細を實際

ふみふみまのあまのあま

十

あまのあまのあまのあま

家物に呼

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

推大物に心致

あまのあまのあまのあま

あまのあまのあまのあま

常中納言雅康

さよの野や家のかぶるまへに

しの葉よひるまへの枝風

民知らぬ為

寝すむ山路のまき乃の船朝

梅の匂もも高とふらん

祇紙伯忠の

十一

眞の志もいふと知さぬ

かへりのまきもまを此谷

従一位教忠

いひやたを連と娘らん

たらの尾のまきれ舞も

美良政公の

夢のひるまへの人

家の首首をいかに

新社へつゝえのりゆく

大段を居

くの葉のついで巨勢のま野の雪が

炭竈の烟も雪も消あつたよ

後成徳 前園の夜香
寺入道

小野のま葉も消あつたよ

十二

芥のついでに社へおれぬ

よみ

小松のついでに社へおれぬ

よみ

武藏の邦高親王

あつたおれぬ。波の谷にたつた

あつたおれぬ。あつたおれぬ

花園日記

波のうへに花をけしき。若野川

山室帯しきゆのくれ

園日記

雷鳴のま谷のまくれき保く

目影のあへく向の朝を

宗伊法師

十三

心より可あまのすむ雷鳴く

のまのたのまの田のうら

宗伊法師

まの初花の志のまをまて

山室帯の風をすあ

月本居

雷のすまは保谷のれ。梅雪下

花の果こころ古里とみれ

権大弼を教具

色も香も清ちるよ梅の香も

軒の月もすむる

勾当内侍

梅のよ木の刀をまては清く

杯のちぬの杯もあつ

十四

後小松院御製

梅の香のつらもさくあつ

杯のよに勝月おのこ

御製

うめの匂ひも人のあつ

杯のよに勝月おのこ

前太右衛門

梅の卯ある神の香りき
よき福も花の匂は

能阿法師

梅の香のよき月と神もく

猿月おろさるる

肖柏法師

うめなる枝の爰もなると

十五

日ある枝の花のおはま

よみ

柳のよきまきの朝を

空も雨も沈のまき風

兼大徳法師

陰深き岸のまき柳家の夜を

よる船ちりまきの山女

法下初助

春柳の羽けの烟江は晴く

きし肩より雪にのこる

大深院 松尾白雲

春柳の糸よりぬき月出く

文政八年二月三日理

百頁の巻あり

花よりゆりよこひ月さん

冬後基徳

春もあまきつたあつ月の中

春もあまきつたあつ月の中

三浦親王

春もあまきつたあつ月の中

春もあまきつたあつ月の中

兼光女

月すむ片雲後の月あり

梅の白ひて片雲の袖

権大納言冬通

風の音も勝月あふ文果しく

すまみたり月後とそ

権大納言宣胤

十七

春はあけの月さかたけあはれ

まき嵐の柳さかき

宗徳法師

心もあけの月さかたけあはれ

ふもあけの月さかたけあはれ

左近将監

あけの月さかたけあはれ

うき帯ももきぬるころ

権大僧都心教

藤原のくまのまのすむしを鳴て

いそぎ成るる井子の仲と

は眼が噴

為す心の中常に引替く

物六梅のこももきん

十八

多良政公朝臣

古き都とありまきの為

いぬ花は痛ぬ思ひ程けく

源政長朝臣

あせのこころをよさらすや

おし月をくぬき来き

権大納言宗綱

暖かしの花の朝あけもちりやう
明應二年丁酉廿五日お経行
すせぬひる百貫の本筋よ
るもつと待きりひぬる

御新帳

花おき枝よる家の先えんて
あすとも花きまきれ備人
十九

後花園院御新帳

暖かしの花よきひるふん
あすもかきれのまき
念親王の侍
あす花よき人きり列
あす知しよもかきれ
覚親王

花の人も染へ人の言はて
の國世もあはれとよきはて

観音寺前大改有
入道

この花もまきやまのま
れ事しめてまき入氣

前大改有

花はけふ舞まののあはれ
廿

俊のまきまの古里の道

武都の邦の親王

花はね花は告まののあ
言信とまのひまのま

権大納言実香

あはれ花の人もあはれ
あはれあはれあはれ

多良良政公卿

栞し時移遠るる〜花咲く

人の世も千の入りなり

玄澄法師

あゝあゝと世は老のまき

試み〜身はあゝと

法平初助

本

咲花をこの〜位乃始ま

はあゝあゝの世のまき

宗物法師

さうやうの世の遠〜雨降

杜や初らん栞さる位

道中法師

花匂ふ山路の音〜か〜ま〜

平のむらと根と執事つ

忠誓は解

軍近支那の花とくまて
吟ねと後と梅白く

前九右后

年と心と花も人とおん

遠の心と心とらのみ

廿三

法眼が灯

死やと去年も高き尋ひられ
日教と心と花の和れ旅と

大政大臣

心と心と心と花と心と心と
迷へる心と心と心と

御制長

花はしもこきぬきよきよきよ

文治十一年三月廿七日

百首をよみ

おまのこころをいふ

花のついで

花のついでも月日や為子ん

ぬきふらふは道迷ふて

廿三

花眼のついで

花のついでも月日や為子ん

採りまよふ山道の末

後之来途希在信

花のついでも月日や為子ん

背もかきかへしよのかるん

深き純

何れも花はさきの世の心

事なきも梅は風を切る

権中納言宣親

色なきも花はさきの心

事なきも梅は風を切る

後永政新納言

何の花はさきの世の心

十四

何れも花はさきの世の心

智満法師

えぬ花の匂はさきの世の心

何れも花はさきの世の心

後永基春納言

花の色はさきの世の心

何れも花はさきの世の心

三子親王

花の傍に

花の傍に

入道親王道永

花の傍に

花の傍に

善院道勝大政有

十五

花の傍に

花の傍に

宗砌法師

花の傍に

花の傍に

権大僧正心教

花の傍に

まのちよの向ふ日を永れ
道希有矣信

花を月あはれつは只掃りて
世目よらるる雪の心のし

三石親王

家へ花のひらりも煙もわく
竹の葉あはれ月よ立降る

廿六

かへしのこも花乃遠山
風よこもぬま柳の陰
従一位富子

らまよふ花も日くは花も
いふもなつこのやる日影

御親長

いふもなつこのやる日影

文治十二年二月廿七日お祭の御。

お祭の御に

お祭の御に

色々の花よ心のつらさ

お祭の御に

花園の近所

お祭の御に

七七

歌くらきよも入もこよあま

如法 寿院 花園の近所

お祭の御に

お祭の御に

花園の近所

お祭の御に

お祭の御に

三浦親王

神の香の惟ともなきはたも祓へ

こゝろを玉の如くはらへまじく

藤院道希内侍

こゝろに匂ふ婦人の神

都の都いまもとらぬあ

左馬頭為房

共八

花もて同くささるる香もて

移りてつらき世あつたの神も

御親長

花や争ひてさすの鳥

家の首額をさす

梅もあつた宿の物も

園日右大臣

雪の末梢より枝の花もちまに
ゆる文成旁を隔てて

宗任法師

雪は冬する朝靄の花は雪の

影懸あるまのの山

栞詞を雅親

雪を晴みくの花はやうらん

亦九

雪も雪日の世と花も

前大傍正協運

雪も雪日は花のしと

潤もあぬぬふい

宗大僧正の應

雪も雪は花の陰と

雪のぬ色と

法眼を以

夕まのれ友の掃ある花はまて

種も毒よすむをあく

兼大納言執長

困ある野古の花乃陰よまきく

ふすまにくくぬまののを

権大納言至

三十一

種のみを山路の花はゆすけ

ぬる人より跡る方そま

従三位義敏

わしと山路の花はま宿うりて

ふすまの曲のさくはるま

平貞家納言

さしめしはて花はくあま

峯へ靡き月とてさるる事

権大僧都心教

人なる山路果なき花ののち
こよひの風の何と吹らん
常ねとてぬりて花の山雲よ
まよせぬらんありたり

玄室法師

廿一

山嶺の菴と花の咲いあへ

人なかりつとておき

智澄法師

花と月かよふ物とてさへ

同くよとてさるる月

後醍醐天皇
寺入道花園白河院

あまのよとてさるる花とてさるる

只果〜ぬ思ひるるり

権傍山日應

う花多う〜又花まきの花やん

うまう観るよやあまも

能阿法師

高来う〜と花まのやらあまよ

ふまもよ何〜あの人

世二

肖柏法師

たえ〜母のうすく花まんもり

眼もま〜するがの何

権大綱言実徳

中〜花の〜花の〜

人〜ま〜たひ〜

宗祇法師

花より知ぬ代りの春風
こころをばさへんかす

法橋兼載

ねのこころ花のまきの風吹く

花のこころをばさへんかす

深田卿

若きる水かすみのきこす

廿三

鶴の林とつれてあまのす

法眼宗順

片心の糸おほくあはす

春連歌下

春のつとふ瀬の若波

園田右大臣

ちのほや花なせうはんよの河

えりまよ杉根こまへ

三上親王

花をかりし思ふようつらひく

世田

花のつとふ入のつとふらん

十輪院道希内侍

花もつとふやふあつらふら

くわあつらふつとふ山道

御製

花のつとふあつたのつとふらん

あつたあつたあつたあつた

月夜に花をよめる人かす
まはるき花をよめる人か

三浦親王

花鳥よんまゝあはれ榮の菴
背よりまゝ身おろし

道元法師

都のあゝの花乃一り

世五

古しの花をよめる人か

智徳法師

花をよめる人か
別れをよめる人か

武蔵の貞常親王

ちる花の匂よたぬの袖は
百首のひらり花をよめる

物成まけしきるもの事

権大綱云實際

ちの進とこもやうしきの花をん

寛正三年は月九日百首をりよ

あそく柳き句よふささく

後花園院御製

寄もころちる花の夕ぐせ

廿六

世目あつて人のさる信

後永雅後物言

探ちるまきの品里これやうて

まの風弱きそへのさるあ

権大傍心教

古まのさる家の秋よ花はななく

あつたすむし本さるの乃

智識法師

花の枝もよもぎ花の枝

おのね侍も延びり

多良良政公物言

常盤のあしにまきの花も

あまのあまのあまひても

柔佛公運

廿七

朝のあしにまきの花の別も

あまのあまのあまひても

権大佛慈心教

昨日の花もあまのあま

あまのあまのあまひても

宗長法師

あまのあまのあまひても

夢の形も定ぬ宿るて

権大僧正日子

ちすの花よさるおろもねん

短きまの書いそよたり

徒三任重長

まろかろ花よさるあまよ

福も移ぬよすの枕

廿八

宗般法師

しほのけいさつのも花のちよこす

しほのけいさつのも花のちよこす

宗物法師

しほのけいさつのも花のちよこす

愛現ともつらぬ明の

権大僧正心教

月もちり花も世のおあそび
残る花のまもすま

慈覺院道徳寺

花もちり月も今も有り
物もぬきおとさん

道徳寺

ちり花と傳ひてくる夕嵐
世九

よき柳の満る家

冬後重治

ちり花はつらと風も携り
海も根もあつた

葉花寺

ちり花も風も
おもしろいもの

圓白有矣

月夜ふ花よの月もいづるらん

月夜ふ花よの月もいづるらん

若狭の月よの月もいづるらん

道親王道永

月夜ふ花よの月もいづるらん

月夜ふ花よの月もいづるらん

甲

法眼寺願

とらぬまもむらさねの花よの月もいづるらん

契しむらさねの月もいづるらん

宗勳法師

ちの花よの月もいづるらん

月夜ふ花よの月もいづるらん

肖柏法師

と後てふまゝい花よしのせ

果の兒よまも河さきなせま

権大僧越心教

花らる海無風ものこころ

お舞柳木海き念のま

前園白蓮集

のころもえいぬ花さちのま

四十一

いふはかしのいふまのま

三石親王

淀まき河風流てちる花よ

ねるる山のさきおさひ

大段老臣

きよあつる花の流波

文治十七年丙午春百景集

實れつゝと可まけ何ぞ

御製

花のちのちの村の山

のふらやかのけふらん

道親まそ侍

花のちのちの村の山

のふらやかのけふらん

四十二

花のちのちの村の山

花のちのちの村の山

のふらやかのけふらん

道親まそ侍

花のちのちの村の山

のふらやかのけふらん

道親まそ侍

花霞の深もあつよるまひく

あまのくに暮るよきあつる

能阿法師

暖ちる花のふじしるる

古の花も同もあつる

深養神物

かゝる花の老なるの山道

四十三

あまのくに暮るよきあつる

慈照院通神天女

あまのくに暮るよきあつる

あまのくに暮るよきあつる

前大徳正坊運

あまのくに暮るよきあつる

あまのくに暮るよきあつる

園田左衛門

心細くしつちるんはかたし
あふも別入るるあ

よき人

夕なれあう一掃らるる
ふく老のあしきあ

前園日近
四十四

あし吹掃るあくのたなめて
永享元年四月朔日
侍まきあふ

まふあふのなほあまふ
後持鏡金右衛門

ちか城と
あふあふのさむらひ

家祇法師

花の人も花もあつて夏果

世とていふは秋の空

園田右左衛門

尾上のひまわり花のこころ

心とていふは秋の空

法橋兼載

四十五

斜に穴のりまゝ入相の子

意の程月おのる花のこころ

美濃守政経

ゆの〜程の花あつてい

心とていふは秋の空

後一位教忠

花の人も花もあつて夏果

おはひしむらさちや夜母

希方志信

ちる花よめぬ人の夜もて

延徳元年正月十五日庚申の

きまひ

世中いづこにありの奥

御親書

のちうもや花のちるは

え果ぬるもる若草あは

三石親王

ちるすくは花と付せよかこも

かぬの葉の中へ流るるよ

希方志信

口承のいづかへ花のちるも

ふゆのちみゆるはるのまき

権大佐の心致

舟のわたりはうら花の夢をまて

夕の空をて涙をまてん

花も世の愁の色よりうつらひて

段りみまきとわらへ

花尤存信実

四十七

百子なる花の影にちりて

時をまきよはたさる

宗祐は所

花の影をうた

ふゆのちみゆるはるのまき

よき人

花の影をうた

昔の友よまよふに別し

智徳法師

もろちる老の泪と花も一葉

散る昔よあるにせ

後醍醐天皇御
寺の通前なる白雲寺

古枝にさしちるより花の若芽あれ

まはるの如く一葉

早八

おたふたふ

花の早しき葉の子路まよふに

まよふに花の如くすらん

宗徳法師

花の早しき葉の子路の如く

まよふに花の如くすらん

宗徳法師

蓬生よ松風吹て花よあ

ふいもあふの目もあ

宗物法師

花のほふまほ里も夜も

別もあふの世中

能阿法師

山あふふの山あふふ

早九

麩もあふ山あふ

深実澄

花あふのあふあふ

あふあふあふあふ

武都の都の親王

あふあふあふあふ

あふあふあふあふ

宗師法師

法波のよりのまきあるあり候し

今より目とも撰ふ煙物

辨從三位教弘

うもあつ物の并もよきあるよ

よふまのねはあはしく

宗師法師

辛

まきあつ候しもあつ候しあつ

果の枯野のまのたふある

宗師法師

中あつ候しあつ候しあつ候し

元はあつて宿の病もあつ候し

権大納言高徳

海芽の産のあつ候しあつ

長享三年卯月廿四日

長享三年卯月廿四日

薬師の名号と如何に記して侍る百貫

を記す

かゝるる心算をよめるおと

常信法親王

弟代名号のなすくあし

辛二

社司のしるしを記す青柳

宗長法師

法号の飛鳥のこころに記す

宗長法師の摩訶

直柏法師

寺の野の風のこころに記す

宗長法師の摩訶

源政宣

呼子考のよきとてさするは

まねぬえと惟う知らん

よきとて

まねぬえと惟う知らん

まねぬえと惟う知らん

道親王の侍

辛三

山重の花の若枝よるのついで

はらうやうに方はる月

御製

あゝのよきとてさするは

あゝのよきとてさするは

冬後其の

あゝのよきとてさするは

いね色よき一室うらやま

戒の真常親王

懐のまじりたるの玉多

此の世にあらざるは目

後醍醐天皇白毫寺

洲原よりうらやまの山吹

何れもてねむるは

五十四

法下初助

ねむるまじりたるは

あまのたのしみ

法眼証承

山吹の花もよきもねむる

いね色よきもねむる

宗伊法師

山家の垣やたむけしきよのくれ
離れしきよの交りの中

多良野の松尾

わらひぬこまをまことの夜の光
菊の遠く向ふまはる

宗任法師

夜更のよの夜更くまらけく
廿五

二つと軽む神の紅波
能く法師

芙蓉の夜の色あけはるまき
可成の菊も花もさるる

宗任法師

さくらつゆの夜の交りの中
花もあらずとむらさき

権大綱を實際

まゝに承りしむる可しと名残よて

堂告の傍りのか

法橋系載

はつまるの月出

教ののりよる名号

権大綱を道世

五十六

くもへまゝに花も枝もて

はつまるの月出

権大綱を教具

くもれ月出のなるまゝの色

夏連歌

遊々何事ひ果らん

推大綱玄実陸

夏草の心もあはれ

心もあはれ

御製

夏草の心もあはれ

辛七

夏草の心もあはれ

三品親王

夏草の心もあはれ

夏草の心もあはれ

右近衛

夏草の心もあはれ

夏草の心もあはれ

前代大臣

あけ河を月の子とれ

今も忠をん心とある

権律師真宗

まもてえよ月を子と河を

口ねを信深の庵のふのれ

忠捨律師

五十八

山をいへばやいふはく

まもてえよ月を子と河を

権大臣玄実陸

あけ河を月の子とれ

今も忠をん心とある

左近中将公連

あけ河を月の子とれ

はるけしむる神のまのうき

権大佐於心敬

ほしきひの澄しひしよはつて

きくも強しこの都島

かきせらるる言羽の山城く

待たるるや華しおと

冬後基綱

五十九

おあし言れしとあはれし

かゝるの軒に白くあまの

権中初云言國

おれはとていふよふに

偽成かひりしや

三お親と

ほのしちのまをまきしと部公

月夜のての月の交の書

常信法親王

おきかたのてのいよの合のん

まのちのいよのいよのいよ

権右衛門公俊

知のりから福のいよの時

まのちのいよのいよのいよ

卒

江橋兼載

月夜の波のいよのいよ

おの向ひのいよのいよ

法華抄助

いよのいよのいよのいよ

入のちの日のいよのいよ

権中納言元長

ひんぎん〜ちんぎんちんぎん

別々〜ちんぎんちんぎん

ちんぎん

海〜ちんぎんちんぎん

ちんぎんちんぎん

ちんぎん

ちんぎんちんぎん

六十一

ちんぎんちんぎん

ちんぎん

ちんぎんちんぎん

ちんぎんちんぎん

ちんぎん

ちんぎんちんぎん

ちんぎんちんぎん

智周法師

郭三月の如來よあまのこ

心まのまてあまの社あ

肯柏法師

心くまの志ぬよ引あまの

系代庵を軒と並あ

扶三徳氏殿

六十二

高海くまの都よ引く

付くあまの向所教あ

人のしるまの中あ

車のおよあああ

あまのあまのあ

人のあまのあまのあ

社あああああ

後醍醐天皇御製
古入道 兼光 兼光 兼光

橋の東の家にて風は
背の海を渡るもなう

御製

うたはれぬ橋の舟は
しるべにそとを渡る

兼光 兼光 兼光

六十三

意橋より渡るも
舟は

しるべにそとを渡る

兼光 兼光 兼光

舟は渡るも舟の
橋の舟の舟は

兼光 兼光 兼光

しるべにそとを渡る

夕家河原一乃のり

家祚は序

樽俎年曲のさる解俾

文内十四年丁酉月理て百負

連新

末野子と次火来函と也

推大朝乞宣胤

六十四

文系志のりの中百谷号也

海まのり波ちちん

夜尔雅後朝信

夏元の若のりる葉の家とん

あまの若のりる葉の家とん

道か序

あまの若のりる葉の家とん

千尋の淵に身をまかせ

其の法師

水鏡の如く又目の若狭を

三つとて其の家の縁を

あな

あふみの風あつて水鏡を

うへへ布の底に伝へ

卒五

法師の頭

水鏡の如く又目の若狭を

あつて其の家の縁を

あな

水鏡の如く又目の若狭を

あつて其の家の縁を

あな

申すにたゞの月におもひありて
あはれむの言はるる

平助長

あはれむる言はるるの月
あはれむる言はるる

宗物法師

あはれむる言はるるの月
あはれむる言はるる
辛六

あはれむる言はるる

宗物法師

あはれむる言はるるの月
あはれむる言はるる

宗物法師

あはれむる言はるるの月
あはれむる言はるる

式部卿の親由

軒らうくたつる包むて文をおよ

心海にのちのちと出でん

希津鏡を粧康

鏡平より月を常飛る中

雅う雅ううらやの事おぼ

夜ふ長巻

六十七

夢人のこころのこころ

いしつ花のちのちおぼ

美多良政の巻

夢の夢いよの夢を飛りけ

海に海にいよひあはれ

能阿は所

えんまうとあはれとあはれと

人の命をきく灯

江原の灯

ありとみさるがともる中まをねた
一村の松をよみぬきて

深解る世

みねの入目も松のつらみ

あけぬきもあつらん

六十八

大後都志運

まふの月をきく成出るあま

道のつゆもまの月をきく

後位あま

待あまの月も短むのつけ

早明もたあむ短む

岡田右左衛門

夏月のあしの月の影すゝ

佐善只浦の若のこゝろ

佐藤の頌

長井の瀧のこゝろの月

けしきはつらの夕迄のそ

宗祇の行

夏山の月しろうすき 舟 す よ

六十九

冬に 一花咲く松の

智徳の行

清きかへさの月の交わり

まのこゝろの松のそ

正任の行

深きこゝろの月の影

深き月の松とひら

能く行

夕方の暮のまよひ月夜

すまひのまよひ月夜

友の親

白あふまよひ月夜の相

まよひのまよひ月夜

慈院道神友の書
七千

あまのまよひ月夜の相

まよひのまよひ月夜

三宗親王

流れもも枝のまよひ月夜

あまのまよひ月夜

御親

中河のまよひ月夜の相

文政十七年二月廿七日内裏御
大御宇へおせぬひさる可敷事候
飛入多敷杖ちりきころり

深草右衛門

夕家の光もすくく糸の糸
かきと染こもすまふし

宗助法師

七十一

あつある屋人まむ杉の陰
海も杖も風もさるころ

多岐長政右衛門

馬鈴のささりすさの夕孫
廟さくさく風もせよ

よみ

中野の文の字字乃々す

ふんばくふんばくふんばく

宗保法師

けあひのふんばくふんばく
ふんばくふんばく

宗長法師

ふんばくふんばくふんばく

ふんばくふんばくふんばく

七十二

宗保法師

ふんばくふんばくふんばく

ふんばくふんばくふんばく

宗長法師

ふんばくふんばくふんばく

ふんばくふんばくふんばく

宗長法師

流るる水もあはれ流るる枝の

秋連歌上

物さへ世の未だ〜

前中納言雅康

秋草好〜

あはれ〜

省柏法師

すゝめ〜

うむのしむとてふりしと知

法橋兼載

夕露のつら都と好まて

守り籠るふらぬり

法眼宗師

待人の事ぬ古りし木きく

るら舞ふ宗師の古り

七十四

宗祇法師

柳らの伏保の河せらぬあ

都事母体ふらぬあ

能行法師

交いの木らの初月のさし

同くあて教事のみさし

権大僧正心敬

枯木を轉の上の枝に成る

月空の如くは枝葉を

老翁の如くは

霧の如くは月を三日月

あふ海に流るる水

葉落の道典

新すもは秋の物に

七十五

雲の如くは枝の葉を

水に流るる

枯木の上の枝に成る

月空の如くは枝葉を

老翁の如くは

霧の如くは月を三日月

あふ海に流るる水

三品親王

朝のまより 秋の風を

又 秋の神を

御製

七多の丁書

長子年八月廿四日書

秋の神を

七十六

権大臣玄実隆

早もりの秋を

うまふみの秋を

希有なる實

まの秋の別路

くまの秋を

洋友真

天の河あもせらぬ姑風よ

空あの中の花るる月

は解き頃

七夕のあもせらぬ穉子娘よ

一ふたねむいよのたまひよ

は平行助

あもせや 宿と待らん

七十七

空に雲あふぬ姑風よ

源秀満

秋のこもせよ 蠶のこも

離れこもや 友の姑

源富胤

新の風あもせらぬ

こもせよと 知老の姑

宗廟に呼

福元の秋のつせもいさへ

秋のつせもいさへ

権大納言と通

月と風の危の秋も

文政七年酉和漢後句付

河原の病治く秋も

七十八

とくあり 慈院齋神大政有

子象も色く危のむく秋

家もいぬ秋への秋も

宗廟に呼

誰社と待てらふ白み露り花

契りぬおと若くさるぬれ

法橋兼載

小男菟の業とみせ入の務とを
山とや為らむとての事
みせ入長女

夜を元野の杖萩ちる果て
古き都のさるもた

権大内言言清

お拂文の達せしあゝ義とく
七十九

お業と散れるのあゝ頃
宗師法師

古きいさのよの軒のあゝは
沈まらぬの軒のあゝは

三お親と

あゝのあゝのあゝを
あゝのあゝのあゝを

芙蓉和書初稿

花と遠く家の光の印をたす

秣の如く花をたす

法下家範

初よりうさすの山野の家をたす

月と山とをたす

従二位因成

平

梓弓矢田世の海草をたす

ちりあぬ花もたす

法眼が願

花の如く花の床をたす

あつた家まで花をたす

肖柏法師

花の如く花の床をたす

月やるる家も大船の舟り

後園 花雪百夜書

色のみちのちの花さくらうら

向と月よ入る秋の

家伊は師

夕家よ花さくら葉は心よとて

小萩

うらひ小萩鳴る

半一

権夫侍が心敬

すまきちる 尾上の文の初吉

哀くらふる 是れあはく

は橋のあ

すまきちる 未だ月の初は

霜

の

き来はよは眼之

花は現を雅康

秋ハはや 庭花 葛花 うらひ

うき事をてり 洞子 神ぬゆ

権大納言 實際

夕の秋や身をもしほるうん

昔もこのふたねうらひ

家長法師

杖の古郷人のあしうらひ

廿二

浅茅の糸の人の由新

権大納言 心敬

家のあしうらのあしうらひ

あしうらのあしうらひ

あしうらのあしうらひ

あしうらのあしうらひ

前大納言 親長

あつたしつちのつちのつちのつち
あつたしつちのつちのつちのつち

御製歌

目くちのつちのつちのつちのつち
あつたしつちのつちのつちのつち
あつたしつちのつちのつちのつち
あつたしつちのつちのつちのつち

あつたしつちのつちのつちのつち
あつたしつちのつちのつちのつち
あつたしつちのつちのつちのつち

辛三

冬談其綱

あつたしつちのつちのつちのつち

あつたしつちのつちのつちのつち

権文傍心敬

あつたしつちのつちのつちのつち

あつたしつちのつちのつちのつち

能阿法師

於伊の洞より入るる
儀の事

宮道親交

於此の事
丁度村におれり頃

大段有

於此の事
二十日

於此の事

御制

於此の事
村の事

三石親交

於此の事
すまひの事

為照院遺贈本意書

中うしみ秋のよきよき文も秋よ

秋も春のよきよき文も春

本意書

春も夏も秋も冬も山陰よ

秋のよきよき文も秋よ

宗物法師

八十五

山本の野と夕暮と麻呂て

岡のうら田のふしはせは

能阿法師

山本の月と麻呂のよきよき

秋のよきよき文も秋よ

道盛法師

初月と麻呂のよきよき文も

出づる月六日二日の頃

推許の云々

幸くやう麻のまゝも目さすて

契と枯す通ひ絶ゆる

宗保は師

あまつる愛好の男者さるる

家のつる世に世ふる神

十六

益院念道勝友

汝もかあさるる世の事乞う

文治七年九月十日は月書す

庚申のまゝ

なひらぬ仲と何さるるん

式部と邦高親王

長におもたれそ麻の事さしよ

たゞのあはれもあらず

道親と道永

素直の庵もあらず

うすき清の村のあはれ

参拝東路

事なるのあはれもあらず

ふらふらの村のあはれもあらず

八十七

名を以て政記の

夕のあはれの一は

あはれなる村のあ

権大徳の心教

あはれなるあはれ

村のあはれなるあ

宗叔法師

下きにありて初為の事
今路のこゝの心と月
は眼を噴く

候のまに初為をみる
うき世の事遠き心裁

智識は行

あやういゝ。お為のこゝ
六十八

杖やんとて後ふたをる

権大綱を空流

古くともかたてもある。天津為

入の物り。道の才高し

柔佛心義運

為のこゝを人のあま色付く

浅茅凡や杖をもちり

宗長法師

夕霞の白き野に

夕霞の白き野に

日昇法師

夕霞の白き野に

夕霞の白き野に

宗益法師

六十九

夕霞の白き野に

夕霞の白き野に

法下法師

夕霞の白き野に

夕霞の白き野に

圓白法師

夕霞の白き野に

奉方晴の日の影

式部卿高親王

を根とてねと月とて

ゆくのさるはさる

権大信朝日よ

きよき月の末はあは月出

向ふかさへ海通さる

九十一

江解の頃

末節さう月とて

夕の柳はさる

丹治氏奉

逢ふ月の影

さるさる

さるさる

宗祇法師

中流をこみぬる舟すまは

文明十三年二月前集傳心通典の

長谷川坊主慈照院入道大政大臣

百首集巻之二傳一

つらも早く水も音なり

舟中詞言雅康

九十一

美上河のねむ月の松流て

陸奥の彦も國さしは物と

早忠説

阿古やの松もさるる月うけ

口のささるる舟も信もあ

権律師院隆

春日野や月八ひあへ七はあま

文明十六年二月月書百有陸家
拜くえの古の月

慈照院道妙女御

すのやの夕の月の夕の月や

口たまはにふふ陸家

深子女御

用あふんぞ月の子らうて

九十二

明應元年九月十三日百有陸家に
可也も情の平ふ志れり

御制書

あられまうの月とえらさも

あいの雲もあうのう

大務の御成

月とあふ通のぬさもは

かこ野のうら路家のまく

徳川氏師

有るおのこあつたおん

村のまもらんく

多良持世翁

徳川家のおの月と村ん

おのまもらんく

九十三

清越法師

村月入る村せの

刻つ勢いりきん

前大納言親長

丸きよ杉村の月と

人のうらめしおん

忠徳法師

えね只調きある。杖の月

中ねる宿も秋風そそ

権大僧正心敬

月のあきふくれのまよき

秋えのほもあきそあられ

よきふり

夏にの拂捨らの月そそ

九十四

あきふりあきふりあきふり

江橋魚載

あきふりあきふりあきふり

あきふりあきふりあきふり

あきふりあきふり

あきふりあきふりあきふり

あきふりあきふりあきふり

小野國解云

いふに、月とも露の木のそ

何事とゆゑ、木の味

贈儀三位教弘

村をいふ交月の出ぬん

月方ちうく、存るゆゑる

三本歌五

九十五

親よき月の形来よ、可なり

交月の露の形もや

御制歌

いふに、月とも露の木のそ

普き光入目とある

権大納言實際

月の形とあはれ、いふに、光と

程を程女待のよる

権中納言元長

むすも月よ暮の流やまむ

空の世の心あふとと

紀光信

月を流るるに拂ふらん

空の世に空も

九十六

家光法師

後ひびく流や今も暮の月

空の世に空も

元何法師

空の世に空も

空の世に空も

元何法師

夕の光の月をまき天の糸
いとくぬ糸の遠きこと

宗妙法師

武蔵野のあきの糸の月文を
ひきよきぬ家の杖を

後永光僧

野への月糸のさうなうらな

九十七

空の根の草よきの清なり
深当紙

山陰の草よきのぬ月更にて
今よりある所の糸の

権中納言國

杖の目ばかりの月もうらなひ
おのゝちあてあるもさう

法眼紹承

空しくもいふべからず

別れもあはれ

あふれぬま

月がたまたま

あふれぬま

権柄玄空親

九十八

月がたまたま

あふれぬま

あふれぬま

権柄玄空親

月がたまたま

あふれぬま

権柄玄空親

此の道の色々月交しく
踏もえぬ乃の交わ
指夫信於心教

白くも鏡の月の白きおよ

多きうらむき材の音

法眼を頷く

あまのこゝろの流るるあつらん

九十九

空の瘰癧を述るるあつらん

多き良政の節

月夜はあつらんあつらん

別々のあつらんあつらん

あつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

あつらんあつらんあつらん

持大親玄家編

月白き嵐の村の春の文

春の文の寺

常信親王

流るる月軒の影の文

春の文の村の文

從三位義敏

百

春の文の月を別

六接河の春の文

推中納言縁光

秋の文の村の月

春の文の村の文

後永盛

神向あらず村の春の月

馬場かきつ後

宗順

山つらありとて秋のよの月

中宮死にけりも色あきて

十輪院道前

ふりもい月と何よたらん

捲きて千里とわたり玉簾

百一

御製

杖のさかしての月あまの宿

秋連被下

東路遠一歳月事おん

よりあり 宗物法師

ふりくものいよりの物近入

古き園金よこひらき

奕初之雅親

室月の物もち出る都人

百人

雅被にくし浪の浮き方

御製

雲の月もみちのり

文治七年十月被岸の因書

院の書事として書ける

波の上海のさるもな

三浦親王

ゆきあふすまの月のみさき
きぬみづの波のたぎる
宗義

今もあふすまの月のみさき
ふもたふすまの月のみさき
能のたぎる

あふすまの月のみさき
百三

水のみさきのみさき
法常の助

雅波の月のみさき
あふすまの月のみさき

小野

あふすまの月のみさき
あふすまの月のみさき

権丈河之密座

更級の杜ひらきらんお母の月

花園を飛家して百韻のをあや

重し鶴まはるるまにひる

初せの核糸の因のおおひら

余らさひと思おひら

よみ

百四

月の中お母の葉糸おあひら

常徳院が後者お家して百韻まほ

かりの初南のそもなるる

後糸お初お母

鳥扇田の月よちつるおあひら

近江のうみの近きこえ後

深きお満

とる年し月流て

とふもふふあひのふふ

従位高子

社とて月之光のあつて事よ

昔のふとふとふと

忠捨法師

古舞のあつて月よ物舞て

百五

あつてあつてあつて

権大佐助心敏

古舞の逢り月をさすらるる

文相四年正月廿七日書きて

百首奉寄り

夜ちるるせよの白く揚

染大綱を教秀

御平御子の月。捲く

位はひぬるの陰家の杖

後花園院御製

かたはるの庵あつた月ひて

風のふり小母のさやみ

二宮法親王亮胤

まの月よあつる。御の夜

初元におのろの来

権傍正日應

初月の早のいふやのあ

香るき道の初来とるや

後宗より

初月には大やうのあつた

おの月あつた

智識法師

山の村を白き月夜に

同別の陸のそと

夏糸糸種

心交ぬる交ぬる

心交ぬる交ぬる

夏糸糸種

夏

心交ぬる交ぬる

心交ぬる交ぬる

夏糸糸種

心交ぬる交ぬる

心交ぬる交ぬる

夏糸糸種

心交ぬる交ぬる

まろしほねのまののうけ

園田楽吉

物見の花もきつゝふさむおと

平のくがも仲のそく

は眼をのり

まのまの花の朝見うらひて

潤まらふ赤きうの露

頁

存隆法師

物見のまのまの花も

一目もきつゝあまのま

智識法師

あまのまの花のまのま

まのまのまのま

あまのまのまのま

宗長法師

吹出の言の野分の草乃乃糸

かひもこけぬ物事の候

多良良政の物言

おもしろくもなつかしくもあつた

草葉のぬ雷の中村

宗祇法師

百見

野分せし夜の月影よる所々

遙かすまの所の言信て

前九太郎

梅葉の色もいとあはれさう

鳴きおののけが秋なり

寛政法親王

かきくも同の梅葉もあはれ

うまき栴多うまき栴多

藤糸長春

里幸元筑波の早う田や栴多
栴多けきる用さく

宗祇法師

うまき栴多うまき栴多の葡
又うまき栴多の初を
百早

宗祇法師

うまき栴多の早う田や栴多
里のうまき栴多

宗祇法師

野のうまき栴多の早う田や栴多
竹木の中うまき栴多の月
宗祇法師

隻又鶴くひさむおねん
新よひのひさむの月

首相法師

枯月のおもひ鶴さうま

高かき萩の末よれ

柔洞之雅親

小鳥のとりきぬる 待

百人

丹鶴出てえも杖の野

御製

眺のきは入の水の交りあ

ききしきあ入の夕暮る

よみ

はるしと秋よのころ 眺の野

若もきぬ小糸の花雪の月

とていふは 権大僧正心敬

まゝ生くるれの 杖の澤水

は眼を閉

夕や暮るあやの月と野のく

後持るあやの月と野のく

能く法師

能く月と野のく

陰をさすく 初末の杖

権大僧正心敬

幸か運よとて杖の根日く

杖の根日く杖の根日く

智徳法師

とて杖の根日く

杖の根日く杖の根日く

宗源法師

法王の御子とて凡はあまて

山室に幽き月よ入禪

法下初願

うせやもまの衣持さん

ふもあまの杖のし紙

法眼を以

華深のふもあまの衣

月とて同く光るうたれ

法持兼載

家法とて白櫻玉持

かゝる色もまもは人の真

宗祇法師

松とて深の露の中庵

寄きし月たつる文よ

後永利徳

月女の葉白き材由の夜
蓮も子孫や登乃菴

眞細言雅親

草むしりし宿の杖を

何ら宿のちとらん

前尤若良実

夜とに拂ふ人なき竹杖菴

草末と照す月の中夜

慈擔法師

雲のおほく杖のうん隈は

秋の月もかや雨さ

法眼の行

天の音しるる方きれた杖の音

雲の音しるる方きれた杖の音

法橋の巻

秋の音の長きの子の痛鳴て

弱き心は存の音あり

美良の巻

冬に雪の音の長きの子の痛鳴て

百五

月夜に鶯の音の長きの子の痛鳴て

智道法師

園の音の長きの子の痛鳴て

桜の音の長きの子の痛鳴て

新巻の巻

名波の音の長きの子の痛鳴て

洞の音の長きの子の痛鳴て

御製

長秋賦の春のあまの

月よの老花のあまの

後崇光院御製

秋の福をのちのひ子

ふすゝはるのあまの

法眼奉徳

百十六

ら秋とあつても好む悲

若木の露も涙とさる

友尔基督教局

ふふあもあもあもあも

ふふあもあもあもあも

道空行序

秋の福もふもあもあも

飽きざる今宵月も暮れ

法眼の願

杖こころあふとさのひり来

浅茅くまの家の乃五月の

智蘊法師

秋の鳥らのさりとてく凡ト

夕の霞入のこころもきん

百十七

一覺法師

憂おこころひく秋のそ

痛みのく月も悲しき

法眼奉本

古への又いふはつ杖のそ

ふけやこころを人の秋は

深政まき

ゆく老の交るらん

いふはてこそ世の法も

家礎法師

いふはてこそ世の法も

いふはてこそ世の法も

権大傍都心敬

武彦那も世の末も

百十八

軒の平や杉の根の交

智満法師

いふはてこそ世の法も

いふはてこそ世の法も

平政親

葛葉の月や杉のら

家の庭もさうして

青栴法師

色もつ海草やうぶのふもろ

杖とすする家持たるま

宗般法師

津守の陰よまののち有て

存の潤やるとに夜らん

宗砥法師

百草九

色もつ杖のこもろ乃夕日新

同世よいつてふのうもろん

権仲親言通世

口もつ片杖と杖のおもふを

山もつまはるる現の

法橋三載

片角のちまもつ杖と杖

何由清行の降の相承

後承為後

夕白き月影の影も色深て

月の桂とわぬあゝさ

道親王道永

色深き月の影もと袖もぬく

あゝささ道親とわぬあ

百廿

後承雅俊初鳥

月影もあまの影も月影も

文治四年六月深武相傳の詞

よそゆい出ひさしき歌子

あゝささあゝささあゝささ

御和歌

あゝささあゝささあゝささ

築ふらふの舞も文楽の
月の若枝の落雁のさし
まほの月の懐のそ
よ

吹流とるせのおもひに枯海
秋を帯り 菊のさき

芳良梅世翁
百廿一

家の中へおのりて
月をまへ築の月

深え敷

本舞のちの月の枕
くさ目影なる葉又

道安

空なる舞の月のさき

永享元年仙洞へ侍奉す
たじくすきふ麻の糸を

後一任薩國

高き山野の山瓦 杖をさく

まよふおちる津の杖を

は眼を頭

さく馬あきの杖をた

百廿二

千枝のお糸もよこし

初一奉し信天の杖。杖をさく

兼て定ぬやうきさ

正三位藤原

何あつた杖の本位の侍ひ子

さたき舞と杖。古縁

前関白近衛

杖をきり河内のかた目川へ

藤原のきく明の山陰

柔佛の義運

杖のきり河内のかた目川へ

田舎の庵のきり

柔佛の道興

杖をきり河内のかた目川へ

百廿三

杖をきり河内のかた目川へ

柔佛の道興

杖のきり河内のかた目川へ

杖のきり河内のかた目川へ

祥盛法師

河内のかた目川の杖のきり

杖のきり河内のかた目川へ

法華初願

やうきおぬ森も古来の村河を

さうくうしつさきふされ

紀光信

惟あきし秋のさぬも成ぬん

徳つ信る推業のり

智道法師

百廿四

長月の後波のさぬも成ぬん

旅つ信る推業のり

祝教友記

舟のつ陸月も新あつり

旅つ信る推業のり

法眼寺願

新枯のむらつた宿も枝交り

えやの絶まり〜家持玉の緒

希方石香

糸通ひ風さき花の中のみ
馬繁女の首とあし洞もら

従一位推行

あつたに交りて糸よらりか

光隆の〜月よみ

百廿五

三羽親王

霞と拂ふ嵐や糸と緒らん

〜おのこしよらり〜嵐

持丈傍か心教

糸白き椎のまゝの杖もろく
嵐の〜おのこしよらり〜

宗長法師

屏上のねま 枝の交り
鳴門のさす風の想

智蘆法師

まきの海もほろも 枝の交り
はらひさしや 神の上

寿安法師

おもしろく 翠も 岩の枝のたのしみ
百廿六

木と 伐木の 信楽の里
智蘆法師

細やうの 田の 刈り 末の 枝
山雲をく 暮らつた

権大納言 實際

白妙の 影おの 月も 枝の交り
何多うと 送る 秋を

葉細玄季春

長月まやみぬのしけり文しく

かよも舞ひ文のさるの元

さる良政松鶴

よあしの月待きよもたいて

花もはる夜もせぬ朝鳥

葉細玄季

百廿七

月細く出れよあくる東きしよ

花もはる夜もせぬ朝鳥

葉細玄季

花もはる夜もせぬ朝鳥

花もはる夜もせぬ朝鳥

葉細玄季

月の色は花の枝よ早あうて

新古今のまゝの御いし

新古今の御いし

新古今の御いし

新古今の御いし

新古今の御いし

新古今の御いし

百廿八

冬連歌

送り迎ふ。この中菴

新古今の御いし

新古今の御いし

新古今の御いし

御いし

新古今の御いし

本葉のしほれあき頃

三石親王

あきも月に出てもくもらん

秋のふ月もあきせき

孫政卿御后

あきも何あのをに月待く

あきもあきあきの山を

百廿九

孫政春

あきも横河の月や何あ月

あきもあきあきの山を

法橋兼載

あきも遠いあきの夕もあき

あきもあきあきの山を

宗哲法師

馬牙待岡道の里の夕時由

定女身方の初来りし由

字勲信師

心されのさの下道

冬月のおるまのや

宗祇法師

小松松河も風もさるや

百三十一

とて交りぬるは

推大傍助心致

あつた方同し程えり何あは

なむとて遠きし心

葛原吉澤

都よりさるの音りし心

さるるあゝあゝのまゝ

花傍山拾遺

らむし存る本葉のちり居て
あうせとかりる尺はして

江服ちり

本葉のちり居て

あうせとかりる尺はして

あうせとかりる尺はして

百三十一

あうせとかりる尺はして

宗保法師

あうせとかりる尺はして

あうせとかりる尺はして

お仲國縁光

あうせとかりる尺はして

お板や園のちり居て

式部之邦之親王

青羽の心り由縁あはるる

まげし妻のききあはるる

常徳院贈太子

片名の橋のうね糸よ凡行く

ゆぬ〜ね社あはるる

花より白逆巻

百三十二

爰後ふり糸とまげし由縁あはる

ゆみ於るあはる山里

権大僧正心敬

あゝの糸は流る糸をよ福元と

こゝろあはるも好まはるる

智因法師

本業ちる流ちる糸よ宿古と

家河やぬ老の杖を

平孝法師

徳ぬは潤木家のしらぬは

くはまのまのまのまのま

まのまのま

早こまのまのまのま

まのまのまのまのま

百三十三

源政宣

まのまのまのまのま

徳ぬはのまのまのま

神益政

まのまのまのまのま

まのまのまのまのま

家河法師

いふ糸のしむる病枯る母よ

文政十二年十月廿七日書す百頁

のまゝあり

おきき夕の月よ待倦く

神祇伯忠臣

うむ母の尾花ふれ枯るらん

山の陰まてもゆるるるる

百三十四

御親筆

そほほむかろろりも糸おほく

おの糸ふよおつる病書

糸大綱之教書

おろろる糸のり糸のほれく

たのじもある糸老のひ未

夏尔志の心

を枯の森の下のまき待とく

雷とこまの木の一本

推律師隠居

まきまのこまの木の材まき

からまの文の一年

法橋弟載

玉巻のまの木の森のまき

百三十五

樟とまきと楓の柳葉

法橋弟載

まきまのまの木の森のまき

古木の木の木の木の

道直法師

樟とまきの木の木の

海とまきの木の木の

源朝則

嵐の音やあつと笑ふあはよ

今もよすく昔のあはれ

宗徳の御

あまの松乃よりあまのあはれ

吹らすせのきんぎょをい

勾当内侍

軒らきねの葉白くあはれ

遙く神楽の椿あはれ

あたまの

あはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれ

十輪院道前

あはれあはれあはれあはれ

夕のゆる井さるる春

宗伊法師

雲の白たもれさる春の文あはん
濱の早妙さ色よららね

深辺那智鳥

後もつる雲ね糸凡吹く

風さよくくらの下菴

百三十七

智渡法師

権のたつる雲のしらあや

春羽ゆらるる雲さるる

能阿法師

朝雲の月。杉舟

春雲のほらさるる

よ

かきつばたのうらみ

かきつばたのうらみ

十梅院

月よ何ものへ

降つては

候

かきつばたのうらみ

かきつばたのうらみ

源

かきつばたのうらみ

かきつばたのうらみ

権

かきつばたのうらみ

かきつばたのうらみ

空を渡る鳥

あつたおのちの鳥の羽は

卯^酉のころの本家

宗師

あつたおのちの鳥の羽は

卯^酉のころの本家

宗師

百三十九

あつたおのちの鳥の羽は

卯^酉のころの本家

宗師

あつたおのちの鳥の羽は

卯^酉のころの本家

宗師

あつたおのちの鳥の羽は

海の上ある遠さのけ

清眼の頃

物よひきみのけり高降下

仲よみんの花るん

は標あな

枯野よりのみこの初音

築の及のつへ山屋

百四十一

源友興

と海客の舞のわらえん

山風よみあなむら

よみ

木葉の上のうす音のた

極てさへ一里のきり

後園 寺入道 茶室 白文 政吉

此指の如く流るる雷は
よのれに平らりと松古より

法眼の頭

橋よりの如く雷を打拂ひ

空雲の如く雷を打拂ひ

深持知

月よ夕なれ 雷よ月な

百早一

持場のもくし侍おこしあれ
推大信教心教

くさぬ月と待らるる雷は

のちり初翅の目撃のさせ

松古傍都目さす

おのちの月と待らるる雷は

くさぬ月と待らるる雷は

後永為後

夕の暮よるよき子

乃後ままの道所

は服を順

空のしるの聲のむき

まのむきおふをれ目

椿天酒を教具

百四二

空のむきおふの道後

まのむきおふの道後

宗師法師

空のむきおふの道後

まのむきおふの道後

寿友法師

空のむきおふの道後

市村に道すたるを

富光法師

舟通し伏見の船氣を晴しく

河波きくこの岸

日晟法師

小舟の櫓のやぶる雪を晴しく

新なる人おぼゆるかた

百四十三

源経行

舟に揺る雪の朝川

舟のやぶる雪を晴しく

正徳法師

舟の櫓に一筋の雪を晴しく

舟のやぶる雪を晴しく

宗光法師

はるかな。岡の宿の宿の宿の宿
宿の宿の宿の宿の宿

三石親王

寺近の境もさぬ宿の宿の宿

冬にさし月が宿の宿の宿

三石親王

冬にさし月が宿の宿の宿

百四十四

宿の宿の宿の宿

宿の宿の宿

うちねの宿の宿の宿

宿の宿の宿の宿

宿の宿

宿の宿の宿の宿

宿の宿の宿の宿

法眼專頌

衆心の心を以て衆心を知る

只衆心の入る所を

宗師法師

空海一筆の事入峰の庵

衆心と衆心を知る

智識法師

百四十五

空海の事の中流の儀々

衆心の事を知る

平長恒

衆心の事を知る

衆心の事を知る

衆心の事を知る

衆心の事を知る

古書の由業あり及絶く

中本野田物居

お〜とらに寄るしき〜に
神もたらし筆も程多し

圓田有書

冬の後若〜のい〜も
月もあ〜つ〜物も出〜ん

百四十六

青柏法所

松のそ〜のき〜入〜のそ〜のそ〜
入〜用〜のそ〜のそ〜

多〜良〜松〜物〜

新〜のそ〜のひ〜のそ〜
意〜入〜用〜のそ〜
智〜法〜所〜

新編御成敗式目の中巻も入詞く
久月の子のあはれなるを

菅原文新

ちかやまの森の嵐のさよは種馬く

あはれ神のふのしる

太政大臣

待てとちかやまの白の色研く

百四十七

昔年の心の木葉ちるは

大なる経茂

はなはたかきしちかやまの流石て

あはれ浦の松糸

藤原経時

あはれ御成敗式目の心は丹研く

さよはちかやまのあはれなるを

岡田宗信

よき波のあし波のあしをきく

明應三年十月結末迄中

邦水きくきくれの色

権大納言実隆

月よたのとも森の蒼鳥はささく

おとほしはのちの円結

百四十八

平貞宗御馬

も来の夢の乃麻やきくさき

二交へる水の波乃里

は眼を噴く

三鳥のつらひささね波よま

波のよき近のま

権大納言心敬

為らば
L'homme est un être

とあるが

おぼろげの眼まもるべき

しるしは彼女

宗師

か
百四十九

とあるが

権大僧正

炭の市のため

杜林と教多

法

業のしるし

ありと

権守納言公親

灰より拂ふ若の煙火

河橋におぬ名所の記念

後崇光院御製

春の明乃おき舞 始

垂れかき舞の燎打し

栗河之親長

百廿

光よりすぬ早飛し

たはる者天のまよふ

権大納言公友

柳葉と観ふ枝より

風吹けるお 垣の月

よき

さきより片枝より

呉那止のあまきこあ

多岐路のあまきこあ

いふ事ぬ事いふ事いふ事

却つてお光の陰のまゝ

前園白作

あまきこあ

五

百廿一

